

「艶才春話」の世界

——立志小説の誕生以前——

飛田英伸

一、はじめに

明治初期、特に明治十年代を中心として、漢字片仮名交じりの漢文訓読体で書かれた小説が陸続と出現した。そのような形式で書かれたのは、主として、丹羽純一郎訳『欧洲奇事／花柳春話』（明治十一～十二年／一八七八～七九）や川島忠之介訳『新説／八十日間世界一周』（明治十一年）などの翻訳小説と、戸田欽堂『民権演義／情海波瀾』（明治十三年／一八八〇）や東海散士『佳人之奇遇』（明治十八～三十年／一八八五～九七）などの政治小説である。もちろん、これらの小説で使われる文体は近世後期から形成された規範的な訓読体と完全に一致するものばかりではないが、逸脱を含みながらも、それを基盤としていることは間違いない。

本稿の目的は、これらの訓読体の小説の出現がどのような文学史的意義をもっていたのか、その一端を明らかにするこ

とにある。分析の対象とするのは、鶴谷向水生の「月水奇遇／艶才春話」（明治十三年）である。大分県中津町で発行された『田舎新聞』に全十四回にわたって連載されたこの作品は、菊亭香水と名乗るようになった作者によって書き進められ、いくつかの過程を経た後で、『惨風悲雨／世路日記』（明治十七年／一八八四）というベストセラーとなった。主人公久松菊雄の教員生活の挫折と辞職、及びその後の都会での遊学生生活を、かつての生徒で恋人の松江タケとの恋愛の展開とともに描いたこの作品は、菊雄と同じように立身出世を志して都会への遊学を夢見る若者たちにおおいにもてはやされた。複数の書肆から出版されたこともあつて数十万部に至ったとも言われる発行部数は、「明治初期の小説中、恐らくは其の右に出づるもの無からん歟」とまで指摘されている。『世路日記』については、すでに前田愛と谷川恵一が物語や文体を当時の読者と結びつけて分析することによって論じ

ており、訓読体の小説の文学史的意義を考える上できわめて示唆的である。本稿では、それらの先行研究を参考にしつつ、ベストセラーとなった立志小説の初出形態に遡り、それがどのような物語であったのか、そしてそれがどのような環境において成立したのかについて検討する。それによって、小説という文学の一ジャンルが訓読体との合流によってどのような変化したのかを明らかにしてみたい。

二、小説とリテラシー圏

「艶才春話」についての分析に移る前に、小説と訓読体の合流という問題について、まずは広い視野から簡単に整理しておきたい。

すでによく知られているように、小説を文学の中心に据える文学観は近代において形成されたものであり、近世においては、文学と言えば第一に漢詩文のことであった。近世の小説、すなわち戯作は、諧謔や教訓を交えた娯楽としての読み物であり、それが近代において地位の上昇を果たすためには何らかの変革が必要であった。

そもそも、坪内逍遙が『小説神髓』（明治十八〜十九年／一八八五〜八六）において「小説をもて婦女童蒙の玩具と見做して美術視せざりし誤り」を批判し、「小説を改良して大文学士を楽しましむる美術となさむ」と述べたように、当時

の文学における小説の地位を決定していたのは、「婦女童蒙」という読者の性格である。そして、「文章の卑俗きは田童野婦に解読易からんを要すればなり」(仮名垣魯文『大洋新話／蛸入道魚説教』明治五年／一八七二) という類の記述が近世から明治初期に至るまでの戯作に幅広く見られるように、「婦女童蒙」を読者として設定することは、小説の文体を平易なものに固定することと表裏一体の関係にあった。

このことはつまり、「婦女童蒙」という語によって原理的に指示されるのが、実在としての女性や子供ではなく、リテラシーの階層性に基づいて仮構された存在であることを意味している。小説とは、最低限のリテラシーがあれば読むことができることが保証されたジャンルだったのであり、読む満足できるかどうかを問題にしなければ、「大文学士」をも含め、読み書きのできるすべての人々を読者として受け入れることが可能だったのである。

それに対し、言うまでもなく、漢詩文を読むためには高度な漢文のリテラシーが必要であった。平易なことばによって書かれた小説とは異なり、漢詩文に用いられることばは、歴史的な表現の蓄積に依拠した、日常のことばとは異なる言語体系の中に置かれていた。そのような言語体系を習得することが第一に要求されるという点で、漢詩文は「婦女童蒙」とは一線を画していた。つまり、漢詩文とは、漢文のリテラシ

ーを境界線とする領域の中で読まれる文学ジャンルだったのである。

漢詩文が享受されたこのような領域のことを、いま、「漢文リテラシー圏」と呼んでおく。「漢文リテラシー圏」は、「婦女童蒙」とは峻別される特権的な階級を形成したが、また一方で、それが漢文のリテラシーによって作り出されたものであるということは、原理的には、漢文のリテラシーさえ習得すれば身分や性差とは関係なく誰もがそこに参入できることを意味していた。事実、近世後期以降の漢学の隆盛は、「漢文リテラシー圏」の人口増大をもたらすこととなった。

明治になって訓読体が公の文体として位置づけられたことは、人口を増大させた「漢文リテラシー圏」を土台として国家が建設されたことを意味している。ただし、近代における訓読体は、漢文を起源としたものでありながら、漢文からは離脱していった。「今体文」や「普通文」という呼称が用いられたように、それはもはや漢文に従属する文体ではなくなり、漢文の言語体系から解放された、独立した文体となった。したがって、本稿においても、以下、「訓読文」という呼称は用いず、漢文、すなわち古典文との対比を強調する「今体文」という呼称を用いることにする。

政府からの布達は今体文によって行われ、人々は今体文によって国策を議論した。そして、国民が用いるべき文体とし

て今体文は学校で教育された。このように、「今体文リテラシー圏」としての国家が建設されつつある状況において、今体文の小説が登場した。

小説が今体文によって書かれるようになった契機としては、今体文が翻訳の文体として用いられ、それによって翻訳小説が誕生したことが大きい。これによって小説は「今体文リテラシー圏」の中に位置づけられ、従来の戯作との差異化が図られた。もつとも、近世においても漢文で小説が書かれることはあった。だが、「漢文リテラシー圏」の内部においては、それはあくまでも余技的なものであり、決して漢詩文の地位を奪うものではなかった。「今体文リテラシー圏」の中に取り込まれることによって初めて、小説はその地位を上昇させ、漢詩文に代わり得る文学形式となるための一步を踏み出す機会を獲得したのである。

それでは、小説はどのような形で「今体文リテラシー圏」に取り込まれ、それによってどのような変容を被ることになったのであろうか。次章以下で「艶才春話」の分析を通して、このことについて具体的に検討していく。

三、小説と漢詩・投書

「艶才春話」において描かれるのは、いまだ「久松菊雄」という固有名を与えられていない小学校教員の「少年」が、

讒言によつて不本意な転勤を命ぜられ、不遇な身の上からの脱却を図つて教員を辞めるまでの部分である。すでに指摘されているように、この時点では、『世路日記』において展開するような、学問に励む若者たちの立身出世を鼓舞する物語が準備されていたとは考えにくい。だが、それを指摘する先行研究が、「艶才春話」を十分検討することなく、当初は男女の情を描くことに主眼を置いていた小説が後に立志小説へと読み替えられたと解釈することには与することができない。

そもそも、柳田泉『政治小説研究』上巻に収録されている向水生こと菊亭香水の自叙伝「文士佐藤鶴谷伝」には、次のように、向水生自身が「少年」の転勤と同様の経験をしたことが「艶才春話」を執筆し、発表するに至つた原因となつていたことが述べられている。

明治十二年三月、塩屋学校ニ転勤ヲ命ゼラル、是ヨリ先
鶴谷、鶴谷女学校ニ奉職スルモノ前後五年、方正謹直ヲ
以テ称セラレ、職ニ当ルヤ懇切子弟ヲ教へ、精励校務ヲ
執リ、権勢ニ阿ラズ、富貴ニ媚ビズ、孳々トシテ務メ、
汲々トシテ懈ラズ、「…」サレド「…」教員中二三奸佞
ノ徒鶴谷ノ声誉ト名望ヲ嫉妬シ、窃ニ之ヲ傷ケ之ヲ貶セ
ント凶ル者アリ、是ヲ以テ其ノ方正ハ頑冥人情ノ何タル

ヲ解セズトセラレ、其ノ謹直ハ過嚴子弟ヲ教ユルノ道ニ
違ヘリトセラル、鶴谷之ヲ聞クヤ、憤然筆ヲ執テ一小史
ヲ起草シ、艶才春話ノ題名ヲ以テ、之ヲ豊前中津ニ於テ
刊行スル田舎新聞社ニ投ズ、「傍点は原文」

この「文士佐藤鶴谷伝」は明治文学名著全集版の『世路日記』の解題にも引用されているのだが、その引用の末尾には「而して鶴谷塩屋学校に転ずるや、左の詩歌を賦し、以て自ら慰めり」とあつて、次のような漢詩が書かれている。

堪憐楚屈貶災遭 群小讒刀何処逃
却喜幽居多清興 南窓坐雨説離騷
(憐れむに堪う 楚屈 貶せられて災いに遭うを／群小
の讒刀 何処にか逃れん／却つて喜ぶ 幽居 清興の多
きを／南窓 雨に坐して離騷を読む)

佞臣の讒言によつて追放され、流浪の末に汨羅に身を投げた屈原に自らの不遇を重ね合わせるといふことは、漢詩文の常套である。この詩においては、表面的には、「群小讒刀」から逃れられなかつた屈原を憐れみ、そのようなものとは無縁の「幽居」での隠逸を謳っている。だが、「幽居」とはとりもなおさず転勤先での生活のことであり、自身もまた屈原

と同じように「奸佞ノ徒」によつて放逐された身の上である。「幽居」の中で「離騷」を読むという行為は、世俗を超越した境地にあることを伝えているようでありながら、かえつて「離騷」への執着を思わせるものであり、「幽居」の虚偽性と、払拭することのできない恨みや嘆きの存在を暗示するものであると言えらう。

漢詩においてはこのような屈折を伴つた感情の表出がなされてきたが、「艶才春話」にはそのような屈折はなく、表現は次のように直接的である。

抑モ該地タル固大海ノ陲浜ニシテ「……」僅ニ此小学校ヲ設クト雖モ「……」其位置遠ク邑里ヲ距レテ人家ノ近傍ニ有ル非ラザレバ四隣マコトニ寂々寥々毎ニ其眼ニ触レ毎ニ其耳ニ聴クモノハ只々猛浪ノ遠ク馬躍シテ巨巖ヲ打ツト雄風ノ遙ニ虎嘯シテ嶺松ニ抵ツルトノミ半夜孤月ヲ渺茫タル滄溟ノ上ニ眺メテハ退之ガ潮州ノ当年ヲ想起シテ空シク其腸ヲ断チ三更猿啼テ凄然タル巴峽ノ西ニ聞テハマタ菅公ガ筑紫ノ昔日ヲ追懐シテ徒ラニ感涙其衾ヲ湿ハシ実トニ無罪観配所月ト古人ノ歎辞モ今ヤ恰モ我身ニアリト常ニ感慨ハ集テ須臾モ其胸間ヲ散スルノ時ナシ¹⁴

ここで描かれる「少年」の転勤先には、「幽居」らしさは

なく、「猛浪」や「雄風」のみが存在する荒涼とした左遷の地としてのイメージが与えられている。そして、「少年」の境遇もまた、韓愈や菅原道真の故事を挙げながら、彼らと同じく不遇の系譜の上に位置づけられている。

だが、このように多少の差異はあるものの、漢詩と「艶才春話」の両方において、不遇を訴えるというテーマが共通していることは確かである。実際、転勤の辞表を受け取つた「少年」は、「嗚呼誠ニ彼ノ所謂蟬翼ヲ重シトシ千鈞ヲ輕シトシ黄鐘毀棄セラレテ以テ瓦釜雷鳴スルモノト云フベキナリ¹⁵」と、「楚辞」の「卜辞」中の句（「蟬翼為重、千鈞為輕、黄鐘毀棄、瓦釜雷鳴」）を引用しながら自らの不遇を訴えている。つまり、「艶才春話」においては、漢詩によつて行つたような自己の感情の表出が、小説の中の架空の「少年」を通して行われているのである。ここに、今本文の小説と漢詩との接点が見出だされる。

ただし、「艶才春話」において注目すべきなのはこれだけではない。漢詩との接点以外にもう一つ、見逃してはならない重要な点は、投書との関係性である。

前に引用した「文士佐藤鶴谷伝」には、「田舎新聞社ニ投ズ」とあった。懸賞小説などがまだ存在しない時代に、読者から投ぜられた全十四回にも及ぶ小説が新聞に掲載されるといふのは、一見するとあり得ないようにも思われるが、「艶

「才春話」の発表の経緯について述べた他の文章でも毎度「投
ず」という表現を使いながら新聞社との関係を示唆するよう
な記述が見られないことからすると、それなりの蓋然性があ
るのではないかと考えられる。あるいは仮に何らかの縁故が
あって発表されていたとしても、それが投書と不可分である
ことは『田舎新聞』の投書欄を見れば明らかになる。

『田舎新聞』は、明治九年十一月から十四年六月までの間、
創刊当初は週一回、「艶才春話」が掲載された当時は水曜と
土曜の週二回発行されていた。雑報欄のみ漢字平仮名交じり、
振り仮名付きの平易な談話体で書かれ、それ以外の「公布」
や「県庁録事（大分県録事）」などは今体文で書かれるとい
う点は、当時の大新聞と共通する。そして、当時の大新聞が
いずれもそうであったように、『田舎新聞』においても今体
文による投書が盛んに行われていた。

「艶才春話」が発表される半年ほど前、明治十二年五月二
日（第一四八号）の投書欄には、杉本玄応という人物の次の
ような投書が掲載されている。

「…」 纒二四書ノ素読ヲ終リテ外史ヤ十八史略ヲ虫綴リ
ニ読ミ加減乗除ガドフナリ出来レバソリヤ小小学教員ソリ
ヤ助教ト三円五円ノ月給ニ目ヲ着ケ（先生ト云フオモ亦
タ喜ブ）自己ノ学問ノ成否ヲ顧ミズ其ノ鼻ヲ天狗然トシ

其ノ眼ヲムキ出シ其ノ口ヲ鋭ラシ恰モ碩学大儒ノ如クニ
自惚顔ニテ「…」 横着無礼ハ此ノ上至極ナリ「…」 如此
キ教員ニ由リテ以テ子弟ノ教育ヲ頼マバ後來ヲ誤ルニ至
ル知ル可キナリ嗚呼大ナル哉其ノ害ヤ又タ曰ク善政ハ善
教ノ民ヲ得ルニ如カザル也ト然レバ則チ教ハ民ヲ治ムル
ノ本ナリ教員ハ教ヲ布クノ本ナリ豈ニ慎マザルベケンヤ¹⁸

杉本は小学校教員が僅かな学識を誇り、尊大な態度を取っ
ていることを批判する。教員に対してそのような批判がなさ
れるのは、教育が国民形成の基本であるという見地から教員
という存在の重大さが認識されているからである。

この投書に対し、五月十七日（第一五一号）の紙面におい
て、「大分学校教員」を名乗る木田織太郎という人物の反論
が掲載された。

貴社新聞第四百四拾八号杉本玄応君ナル投書家アリ冷語ヲ
以テ小学教員ヲ圧倒シ去リソノ論鋒ノ鋭烈ナル誰カ三舎
ヲ譲ラザラン然レドモ反復之ヲ熟読スレバ其論旨何ゾ偏
小ニシテ嫉妬妬女ノ情態ニ似タルヤ抑足下ノ論旨ヲ要ス
レバ即チ教員ノ浅学ヲ嘲笑スルノ一篇タルニ過ギズ「…」
吾国教育ノ発端ヨリ未ダ十年ニ及バズ安ンゾ千万無数ノ
教員ヲシテ尽ク碩学大儒トナシ至完全全ナル教育ヲ施行

スルヲ得ンヤ是レ浅学輩モ且ラク教育ニ従事セシムルニ
猶止ムニマサレルモノニシテ亦高二登ルヨリ卑ヨリスル
ノ理ナリ¹⁹

木田は、杉本が批判するような問題が事実としてあること
は認めつつ、教育体制がまだ十分には確立されていないとい
う現状を考慮するべきだと論じた。

これに対する反論は、五月二十七日（第一五三号）に登場
する。その投書を書いた人物こそが、佐藤蔵太郎、すなわち
向水生である。

「……」余ヲ以テ之ヲ觀レバ此ノ織太郎先生ニ於テハマダ
杉本氏ガ論旨ヲ能ク了解セズシテ以テ徒ラニ我教員社会
ヲ誹謗シタルモノトシノミ思ヒ込ミグツト立腹ニ乗ジテ
斯ノ文ヲ草シタルモノ、如シ嗚呼何ゾ先生ノ心褊小ニシ
テ他説ヲ見ルノ軽疎ナル一ニ茲ニ至ルヤ抑モ杉本氏ガ論
タルヤ全ク小学教員ヲシテ碩学大儒ニアラザレバ不可ナ
リトシ以テ徒ラニ小学教員ノ浅学ヲ嘲笑シ又小学教員ヲ
压倒セントシタル旨ニ非ザルコトハ余輩ノ信ジテ疑ハザ
ル所ナリ「……」夫レ生徒ノ教師ニ於ケル猶ホ影ノ形ニ從
フガ如クナルコトハ又余輩方言ヲ俟タザルモ已ニ明カナ
ル所ナリ故ニ苟モ教師タル者其身ヲ修メズ品行正シカラ

ザルトキハ生徒何ヲ以テ其身ヲ慎ミ其行ヲ正フセンヤ教
師傲慢無礼ナルトキハ生徒亦タ傲慢無礼ナラザルヲ得ザ
ルノ理ハ当然ナリ²⁰

この後、小学生の間に下等の学科を修了したというだけで
親や兄弟に対して威張った態度を取るという風潮が見られる
ことが挙げられ、教員の傲慢な態度が生徒に与える弊害が論
じられている。向水生が木田と同じ小学校教員でありながら、
杉本に与し、木田に反論したことには、二ヶ月前の転勤が少
なからず影響しているにちがいない。

以上の論争の後に発表された「艶才春話」において、「少
年」は転勤の辞令を受け取った際、次のような発言をする。

滔々タル〇〇社会批評ヲ免カル、者夫レ幾人カアル言少
シク過激ニ渉ルガ如シト雖ドモ固〇〇課員能ク人材ヲ觀
察シテ之ヲ登用スルノ識見ニ富メル者ナク亦タ彼ノ巡回
〇〇ノ如キ学区〇〇ノ如キ多クハ是レ愛憎ニ依テ事ヲ行
ヒ私謁ヲ受ケ務ヲ弁ズルモノ少シトセズ現ニ余ガ知ル所
ノ甲氏ノ如キハ才学兼備シ加ルニ能ク意ヲ学事ニ注ギ該
校ノ進歩較見ルベキモノナキニ非ズ然レドモ憫ム可シ更
ニ一等ヲ進メズ之ニ反シテ乙氏ハ浅学不才一章ノ文辞ス
ラ容易ニ綴リ得ズ只輕弁ト諛笑ニ長ズルノミナレドモ既

二那ノ高等ニ在リ「伏せ字は原文」

伏せ字の部分は、『世路日記』に基づいてこれを補うと、順に、「教員」、「学務」、「教師」、「取締」となる。ここで言われているのは、教育体制の管理に関わるような人物たちの「識見」の不足や「私闘」による人材登用が、「浅学不才」の教員を生み出すのだという批判である。つまり、この「少年」の発言は、投書欄での議論と連続しており、問題を生み出す原因を指摘するところにまで及んでいるのである。

さらに、単行本化以降は削除されているが、「少年」の発言の後には、作者である向水生が登場して次のように述べている。

向水生曰教師ガ言ノ過激ニ涉レル当時果シテ其弊アリシ乎將タ教師ガ見解ノ誤ニシテ絶テ其事ナキ乎且ツ現今尙未ダ此ノ弊ヲ存シテ往々此ノ少年教師ト感ヲ同クスルノ徒ナキ乎否ハ余輩関係ナキ者ノ敢テ知得ル所ニ非ザルナリ今其事ヲ序スルニ臨ミ単ニ教師ノ言行ヲ掲ゲテ現況ヲ知ルニ便ナラシメントスル而已²³

これは、「少年」の発言を信用するかどうかを読者に委ねるものであると同時に、読者がこの発言を教育界の「現況」

と結びつけて読むように仕向けるものでもある。向水生の回想においては述べられていないが、「艶才春話」の成立は投書欄と不可分に結びついている。

このように、「艶才春話」は、「漢文リテラシー圏」において自己の感情を表出するための表現手段であった漢詩に加え、「今体文リテラシー圏」において自己の意見を表明するための表現手段として登場した投書と接点を持っていた。そして、重要なのは、不遇を訴えることと、教育行政を批判することとが表裏一体の関係にあることである。もちろん、不遇を訴えることが自らを用いない世の中への批判でもあるということとは漢詩においても当てはまる。だが、それを漢詩によつて行わず、小説という形式を用い、「少年」という架空の主体を作り出すことによつて行ったところに、近代文学としての新しさがあるのである。次節では、このことについて考える。

四、小説と主人公

「艶才春話」における「少年」は、近代小説において主人公と呼ばれる。坪内逍遙が『小説神髓』において「主人公の設置」という章を置き、「主人公とは何ぞや小説中の眼目となる人物是なり」……主人公の無きことはなし蓋し主人公欠けたらんには彼の小説に必要な脈絡通徹といふ事をばほと

く、行ふを得ざればなり」と論じたように、主人公を中心として物語を構築するということは近代小説を生み出すための重要な課題であった。従来の研究では「脈絡通徹」のための装置としての主人公に注目する論が多かったが、⁵⁵「艶才春話」における「少年」のあり方を考えると、新たな視点から近代小説の主人公を捉えることが可能になる。

そのためにはまず、漢詩という表現手段のあり方から考えていきたい。「漢文リテラシー圏」の中で享受された漢詩について重要なことは、読者が同時に作者でもあったということである。もちろん、誰もが作者として生計を立てることができたわけではなく、誰もがそれを試みたというわけでもないが、一方的に読者の立場に徹する者はまじいかなかった。大詩人にならずとも、彼らは生活の折々において漢詩を詠んだ。それが「漢文リテラシー圏」に所属する者として普通のあり方だったのである。向水生が自らの不遇を嘆いて漢詩を詠んだのも、彼が所謂「漢詩人」であったからというわけではない。

同一の人物が読み手であると同時に書き手でもあるという点は、「今体文リテラシー圏」の中における投書においても同様である。投書欄の読み手は常に潜在的な書き手である。一つの投書が他の投書を誘発して議論空間が形成される場である投書欄は、読み手に連帯感を喚起させる場であり、それ自体が一種の共同体を形成する機能を持っている。小新聞の

投書欄であれば必ずしもそうではないが、大新聞の投書欄に關しては、今体文のリテラシーを有することがその共同体に参入するための要件であった。大新聞の投書欄は、まさしく「今体文リテラシー圏」の縮図であり、その領域性を強く示すものであった。

したがって、「艶才春話」における「少年」とは、作者及び読者と同じ共同体に属する性格を持つ者として作り出された虚構の存在であるということになる。「少年」は、「今体文リテラシー圏」に所属する者と同じように、漢詩的な自己の感情表出と、投書的な自己の意見表明をする主体であった。それは確かに向水生自身の感情や意見を代弁する分身的存在としての面を持っていたが、それ以前に重要なものは、作者の分身であるかどうかにかかわらず、読者が自身と同じように漢詩や投書を書くような主体を虚構の中に見出したということである。

ただし、「少年」はあくまでも虚構の存在であり、より正確には、漢詩や投書によって構成されることばの世界の側にそれを書く主体が定位されたと見る方が適切かもしれない。これによって、漢詩的な感情表出と、投書的な意見表明は、作者ではなく、その主体を通して、その主体自らの感情や思想としてことばの世界に現れる。漢詩や投書におけるような書き手と読み手の間の一対一のコミュニケーションではな

く、その間にそのような虚構の主体、すなわち主人公を媒介させるという形式の新鮮さこそが、小説が今体文に取り込まれたことの動因なのではないだろうか。

そして、「今体文リテラシー圏」として国家が建設され、今体文が国民の文体となったことは、近代小説の主人公にもう一つ重要な要素を付け加えることになる。すなわち、今体文はそれを学習することによって、主体が社会的な自己のあり方を確立させることができる文体、つまり、立身出世のための文体であったということである。中国とは違って科挙がなく、身分制社会であった近世日本において、漢文は立身出世のための文体としてよりも自己修養のための文体としての性格が強かった。立身出世のための文体は近代日本の新たな産物であった。

「今体文リテラシー圏」に属する存在として構築された主人公は、立身出世の論理に則った生き方をし、あるいはそれを目指す。そこでの挫折が問題になるのも、自分の人生行路を自分で切り開いていくことができるという思想が共有されているがゆえに生じるものである。

以上を踏まえれば、「艶才春話」の末尾で「少年」が、「予ヤ今少シク為メスル所アツテ暫ク此ノ卑職ヲ奉ズレバコソ今日ノ如キ胸裏ニモ無キ卑屈ヲ演ズルニ至ル何ゾ長ク止テ此ノ鄙事ニ従フベキモノナランヤ如カズ速ニ茲ニ任ヲ解キ自主独

立ノ基ヲ謀ランニハ」と決意し、故郷を後にして都会に向かうことは、小説が今体文で書かれ、なおかつ今体文を教育する場である学校を舞台にしていたことからすれば、作者の当初の意図はともかくとして、必然的な帰着であったとも言える。立身出世の論理を内面化した「少年」は久松菊雄と名付けられ、区々たる「教員社会」を抜け出し、近代の若者たちの主人公へと成長することとなった。

五、おわりに

以上見てきたように、「艶才春話」は、漢詩や投書と言った「漢文リテラシー圏」および「今体文リテラシー圏」における表現手段を土壌として成立し、それらによる感情の表出や意見の表明を主人公という主体を通して行った小説であった。現代の読者の目からすると稚拙な作品に思われるとしても、それが近代という時代においてはじめて生み出された「近代小説」であることは確かである。

「艶才春話」において生み出された主人公は、立身出世と結びついた今体文に支えられて多くの読者の自己像と重なり、「世路日記」という近代を代表する立志小説の主人公に結実する。本稿では十分論じられなかったが、新たに作文という表現手段が作品の土壌として加わり、主人公書生という属性が与えられたことがベストセラーへと飛躍する大きな要

因となつたにちがいない。これについては機会があればまた論じたい。

本稿で論じた問題以外にも今本文と小説について考えるべき問題は依然として山積している。それらを一つずつ明らかにしていくことによって、従来の研究では見えなかつた近代の小説のあり方が浮かび上がってくるだろう。

注

1 齋藤文俊『漢文訓読と近代日本語の形成』（勉誠出版、二〇一一年）参照。

2 安政二年（昭和十七年）（一八五五—一九四二）。豊後国佐伯生まれ。本名佐藤盛郷、字子晩、通称蔵太郎、号鶴谷。父の佐藤盛義（瀬緑）は六石二人扶持の足軽であつたという（佐脇貫一『佐藤鶴谷翁と私』『佐伯史談』第九十号、一九七三年九月）。明治八年（一八七五）に大分県師範学校を卒業し、小学校の教員となつた。明治十四年（一八八一）、矢野龍溪に誘われて上京、翌年、『郵便報知新聞』の記者となつた。明治十七年（一八八四）九月に大阪毎朝新聞社に転勤、その後も新聞記者として活動し、晩年は故郷佐伯で郷土史研究に専念した。他の業績としては、龍溪が口述した『経国美談』前編の筆記（明治十六年／一八八三）などが挙げられる。

3 『明治名作集』（新日本古典文学大系明治編第三十卷、岩波書店、

二〇〇九年）解題参照。

4 鶴谷外史〔菊亭香水〕「縮刷世路日記序」〔惨風悲雨世路日記〕岡本偉業館、一九二二年。

5 神代種亮「解題」〔惨風悲雨／世路日記〕明治文学名著全集集第九卷、東京堂、一九二六年、一頁。

6 前田愛「明治立身出世主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで」〔近代読者の成立〕前田愛著作集第二卷、筑摩書房、一九八九年。初出『文学』第三十三卷四号、一九六五年四月、谷川惠一「世路」という視界」（注3前掲『明治名作集』所収）。

7 坪内逍遙『小説神髓』（坪内逍遙集）明治文学全集第十六卷、筑摩書房、一九六九年、二三頁。

8 仮名垣魯文『大洋新話／蛸入道魚説教』（明治開化期文学集（二））明治文学全集第一卷、筑摩書房、一九六六年、一七七頁。

9 齋藤希史『漢文脈と近代日本——もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、二〇〇七年）参照。

10 久松菊雄を含め、登場人物に固有名が与えられたのは、題名が『世路日記』となつてからのことである。

11 畑実「明治初期の人情小説——『花柳春話』の流れ」（駒澤国文）第二十九号、一九九二年二月、猪狩友一「恋愛」という生き方——『艶才春話』『世路日記』をめぐって」（前掲『明治名作集』所収月報二十六）、磯部敦「東京神史出版社における『世路日記』の位置づけ」（出版文化の明治前期—東京神史出版社とその周辺）ペリかん社、二〇一二年。初出『八犬伝』受容に関する一考察——『世路日記』と訂正増補版『世路日記』

- 12 『中央大学国文』第四十三号、二〇〇〇年三月) など。
 「文士佐藤鶴谷伝」(柳田泉『政治小説研究』上巻、明治文学研究第九卷、春秋社、一九六七年、二〇八頁より引用)。
- 13 注5前掲「惨風悲雨／世路日記」、六頁。漢詩とともに「蟹の焼くからき塩やも呉竹の世のうきよりは住みよかりける」という短歌も付けられている。
- 14 「月水奇遇／艶才春話」第九回(『田舎新聞』第三三七号、一八八〇年七月七日)。原文「菅」を「菅」に、「更」を「更」にそれぞれ改めた。
- 15 「月水奇遇／艶才春話」第六回(『田舎新聞』第二二三号、一八八〇年四月三日)。
- 16 「投諸中津之田舎新聞社(諸れを中津の田舎新聞社に投ず)」(『訂正増補惨風悲雨世路日記序』偉業館、一九〇五年)、「予少時本編を草して新聞社に投じたるは、今を距ること四十有余年前にあり」(注4前掲「縮刷世路日記序」)。
- 17 『田舎新聞』についての研究には、野田秋生「豊前・中津『田舎新聞』」「田舎新報」の研究——明治十年代一地方紙の初志と現実(エヌワイ企画、二〇〇六年)、春田国男「田舎新聞」の時代——明治期大分の新聞研究Ⅰ(『大分県地方史』第一五三号、一九九四年三月)がある。
- 18 杉本玄応(無題)、『田舎新聞』第一四八号、一八七九年五月二日)。
- 19 木田織太郎(無題)、『田舎新聞』第一五三号、一八七九年五月十七日)。
- 20 佐藤蔵太郎「大分学校教員木田織太郎君ノ杉本玄応氏ガ論ヲ駁
- シタルノ編ヲ読ム」(『田舎新聞』第一五三号、一八七九年五月二十七日)。
- 21 注15前掲「艶才春話」第六回。
- 22 尚 佐藤(向水生)の投書の末尾には、「然リト雖ドモ又先生ノ言ノ如ク一弊ヲ挙テ以テ全局ヲ廃スベキモノナラザレバ力メテ此ノ弊害ヲ防ガズンバアルベカラズ其防グノ説ノ如キハ余輩他日ヲ以テ大ニ論スル所アラントス」と記されている。現在確認できる範囲では、この後、佐藤(向水生)によるこのような「説」は特に見られないが、「艶才春話」の発表までの半年間に発行された『田舎新聞』は現在確認できないものが多く、「説」が「艶才春話」のことを言ったものであるとは断定できない。だが、少なくとも「艶才春話」が投書欄での一連の議論と切り離せないものであることは間違いない。
- 23 注15前掲「艶才春話」第六回。
- 24 注8前掲「坪内逍遙集」、五四頁。
- 25 亀井秀雄「小説」論——「小説神髓」と近代(岩波書店、一九九九年)、石原千秋「近代という教養——文学が背負った課題」(筑摩書房、二〇一三年)。
- 26 「月水奇遇／艶才春話」第十四回(『田舎新聞』第二六一号、一八八〇年十月六日)。

付記 引用に際して、旧字体、合字などは用いず、現行の通りに改め、濁点のないものにはそれを補った。